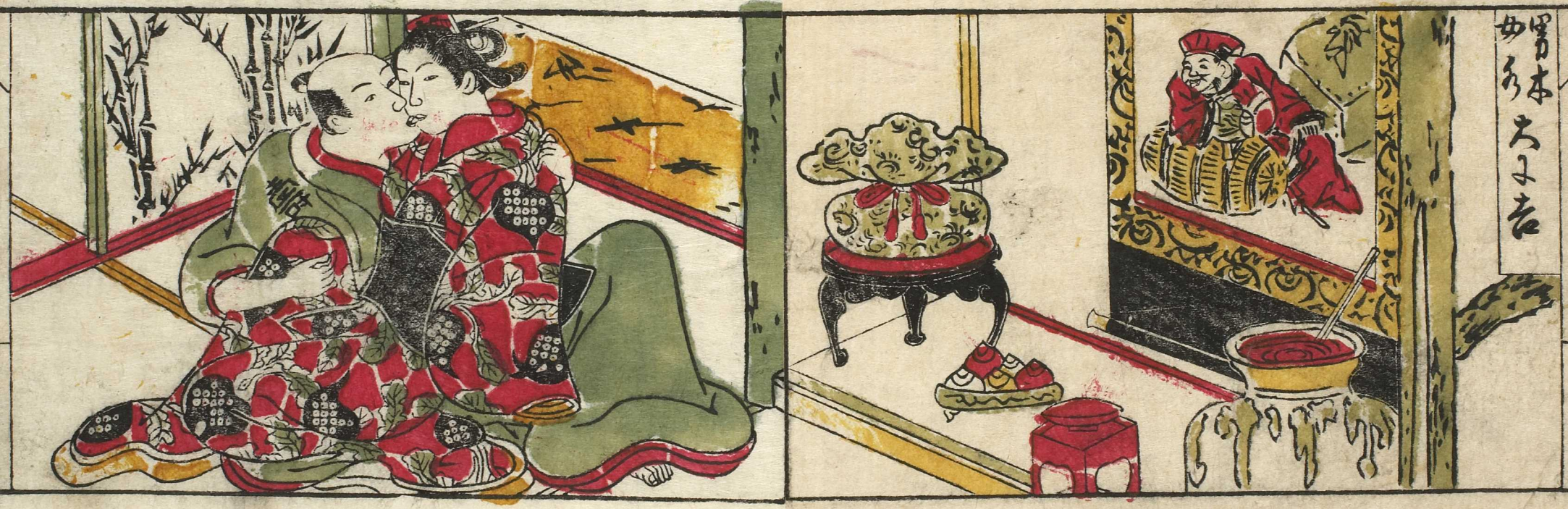
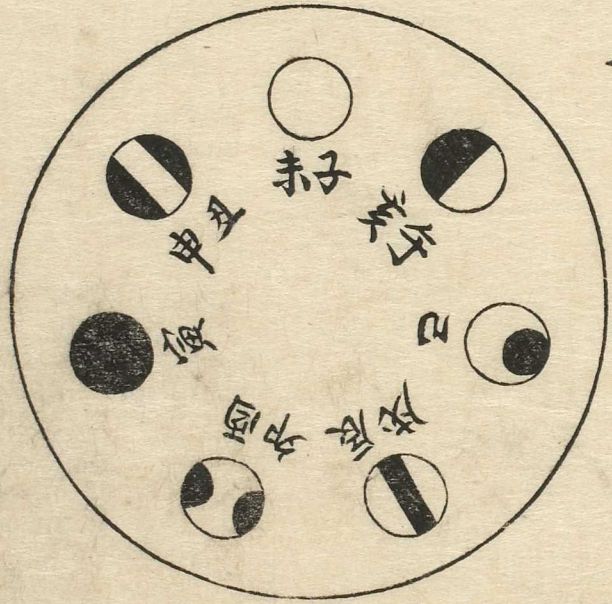


ひ孫かさなるを
得しく末の人
は為しあわせ
ものなり
そうけそんて
そんそん
そん

三世相そんひ



生れそれの年そんの
ひ拡石ハそんこ一名禅鬱そん
ふ人日本よりそん西都は廣
ひよつそんて一ふ赤銅のそんひ
そんとも世は為よ捨よれふそん

○此部かうして生る人ハ万事
乃至つ望ようこの死百年絶滅
生来と実ねて今生へまる此人
お世ハ仮我の嵐ゟ見ゟ女中の
ようこをかぶりるを知ぬそえ
らぞーて活ひ家中をすりぶり
なんぎをせむひようこ今生
まてふん下痢をこづふるの
ゟをどもをくこうけろこ
ぎ百年乃ちくれたいぶん
せつう事ごの病ようてき
けまる後悪こんなをせ
さをおまのみんををそふべー
●此部ようまるハりくとの
大暑里ろ〳〵紙をメどうけ
そうまるこおせて人のようこ比
むこねすこるむひようまハ
おゐばめそつまようなまいぐろく
づゐ更ちぐこそメて八年く
こをぬぎまをりついてぬぐ
るようき時八まよ丸やうる高
ひそれくをる年ようて大すべ
いよかり答ゑつけづ免よて仕
合ろらいせハ数まろとる丸女
人よかろひろをこ
●此部ハりとのろてん里ようろ
山のいもゟメねろけぬて生る古世ハ
希大ててみーぐを時のろーん

へのこゝろなのくてはそうそうをおせてやまぐち御合のねよころされるぐくて人ぐさうねてこ賢水のくく女よ三日まじめに一生もく人をまぐまぐを又大乃辻うのとくても女さくれだ言を出ーくこゝろうけをを休ぶりまるをえべくはくくそう又一気先まいは必ずをけざれぬけぜ

◐山野のうまいおくとの大きぼうむ子又十うけるてうまるおせいるまでをーぐてくぐてふーんよ我本を負てやきどでんどんとをこをうちるをうをき庵のへふこのすぐきうのうをばろ朋のうねずてこ変るでくてかをーぐぐくよれいま人ぐるよるくき時ハくく至とまくのばえとぐるうう年うてもせいぐろを神んでまう好つう

◐山野のうねをお世ハ大のすきう辺がある時梅のくくそやきちこれでうねもうきかく好く幸に十をきまていきりのくわちちぬ女世をわちきるく年とうくくそくのうんんよれ年てこるげんとせーそーろうすそこまろわとこくわうの女夢の知ちそもこう

とのばをよもうをむしえしくかんのよ
さをーくどくにてをうをう男とくを
き人ようかがくうこもうれどもせの
髪の時分おいどをふるまみてそうう
まよ人形やそんちやうこいまうどと
うってりふるひうひまて我女うう
お人ようそうをうをーをハくし。
かどのかくうふうまて女をうれ
ーるうとのを心まをよかまをそう
ぐをもうみてう
世界乃うをまハおまハ
吉原の女郎るまりがたうときまを
ようろうこはせーくぐくそうやまハ
ふさたうとうをる女よあは一抱え
事にお男にお時ハびーやくと
たくくてめこよおうぞおのまく
なうふうれもおせそうぐのの
梅毒の地をうりてかさだもむく
ひょうろくぬくくそうんの時
これのおくるまれるひんをうう
のおのおうをてお女はーこにそこに
ぜんやうのんぐをもうふへー
山野よりうてうをう人ハお
ぜハまたた女まるしう男をみた人
うう人月はすぐて主人よいとをを
りーひいやにおさ時をさめて
お会るれある時ひとうの男時を
うちぐくやまうこれぐうの男

ハアスりの乃 乙秤びちやく〳〵のかと
とゝてゐやとこうんめんすゝぐと
あぐゝとたもさにみりつぺさろ
ぱといつのるをゐやどのめぐゝさの
ぐゝりやうくれあつひそのば
ますころもやいさてゐゝまぬ
とぺまさいぬとそのうて乙弁をし
く死るろりのどもぶおより
てうの面くちまゝの枝とさゝくるう
くぐくよ物てうまハおとこよ生る
ふれどもおくゝこそやぐりいを
ぐうよひまるくなびくかやたん
どうせうとるのへゝ又ハ渥をゐ
等のおちるま事ゐへゝふがゐ

ハ翁よのり見ぐそんぐゝてはま
おりぬやうじんてう

秘伝

まゝもぐれうるひ

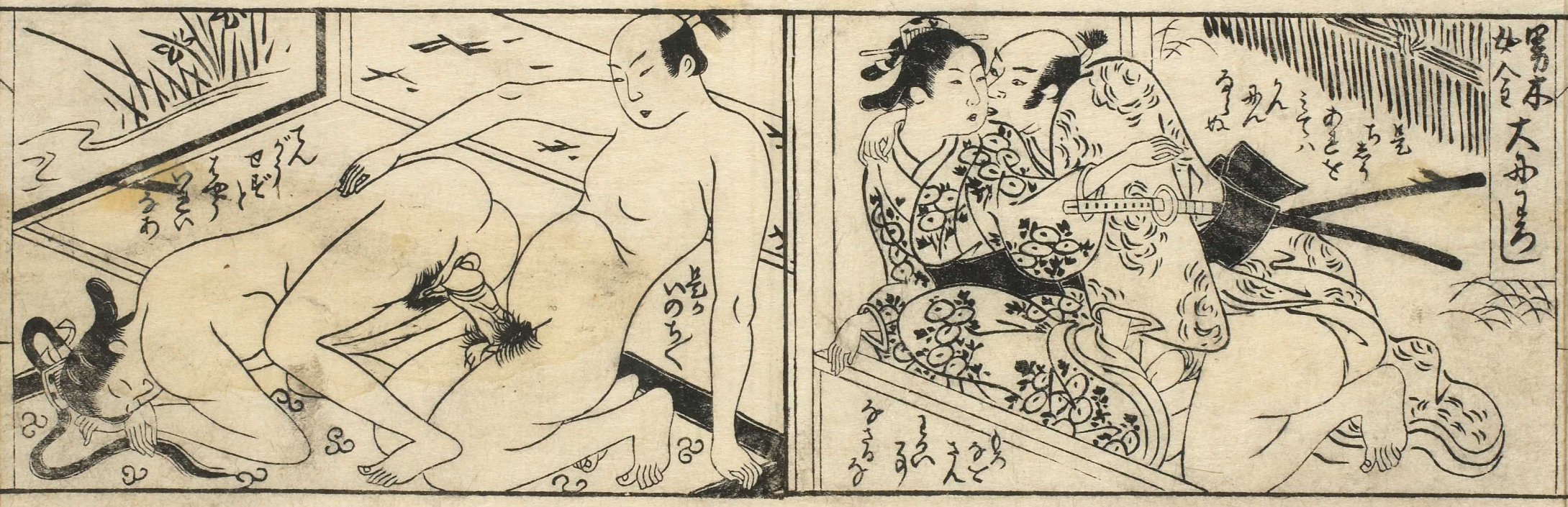
かくのとくとよ
まりさまて通
る八天下すゝて極上ゝ上ゐの
まゝ也るり子ねそゝたとふ
とるくもちりとゝる団ぐて又
あをはちりるとさりてもとるり
ゐいくうりとふりまりるゝその
生ゝ子ゐ事ようゝくかやめ
まゝすぐのゐをぐうられるり
しいぐゝまれるをしるり

かくをもぐさにて
三壮するすべり
一生てんやくのくすりをあつべし
あるくもるしくともよのすべては
かるしかゐんでのこりをくとよみ
てもかゐ流のりんぬきをあつべし
唐里うの竹にてかせてもよ
ぼうさきをうちたゝくべし糸
破もすこしをかくてにげべし

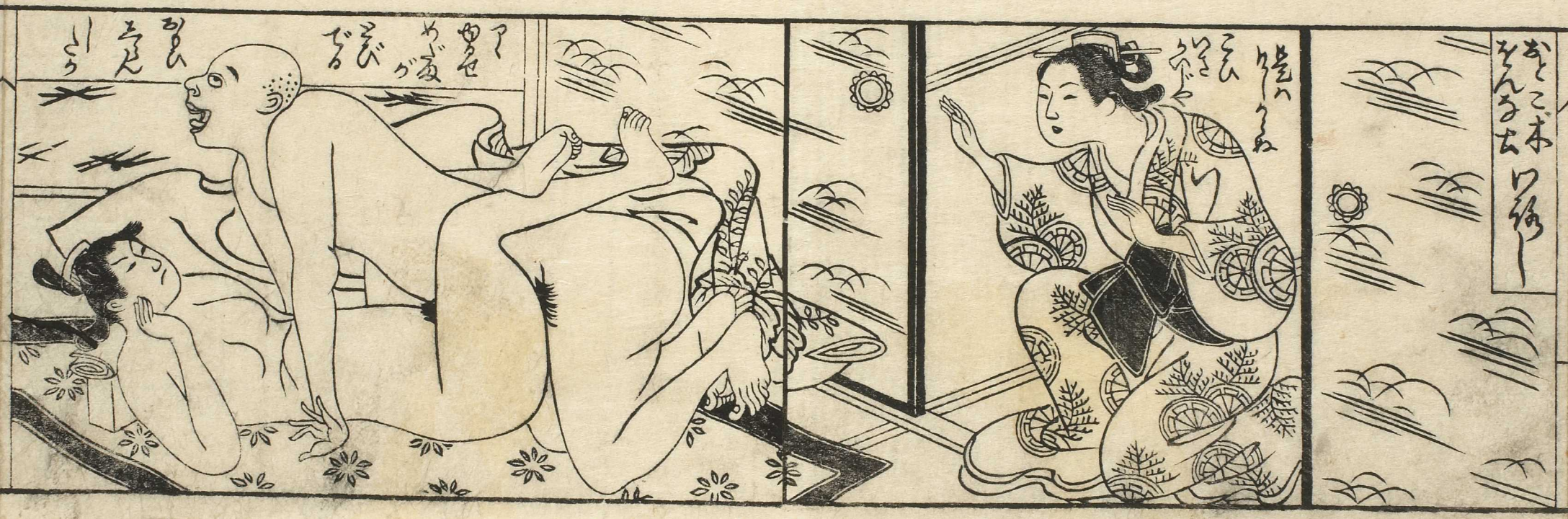
乱糸をしぼりて
ちんそうをそゝかきおうべん鼻がのみてもぐんち
ぐもと洗ひ紙ちまきかさあしがしふてもおなこでえんまぼうきらいするふべし

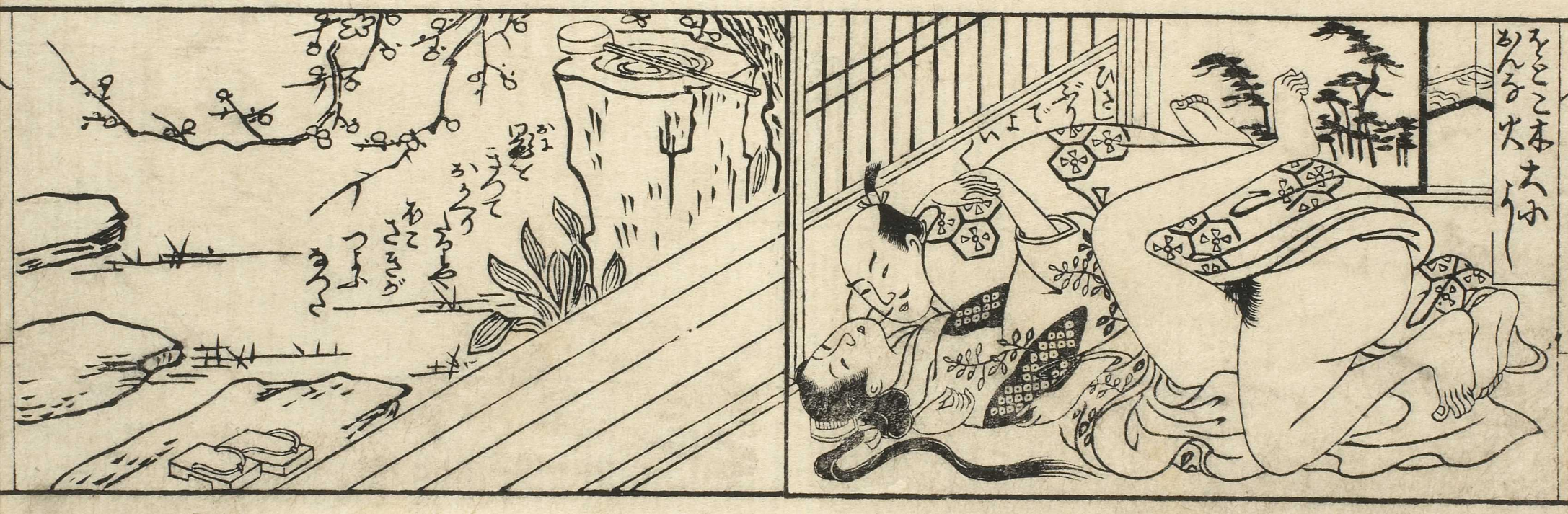
手乃字をぐいはなぢをよ
ちろ〳〵ふりてもこうでハんかんするべしぐもとれ
つゐしやくえんの女ぼうもりかをのぞいてうかゞまぜりやうてもいくてうかゞまぜりやうとてかゝるてゐて出るりのぬらりの時多ろ〳〵てるうめをえんかりとてゐて

籠をこしらえたもの
細竹にて

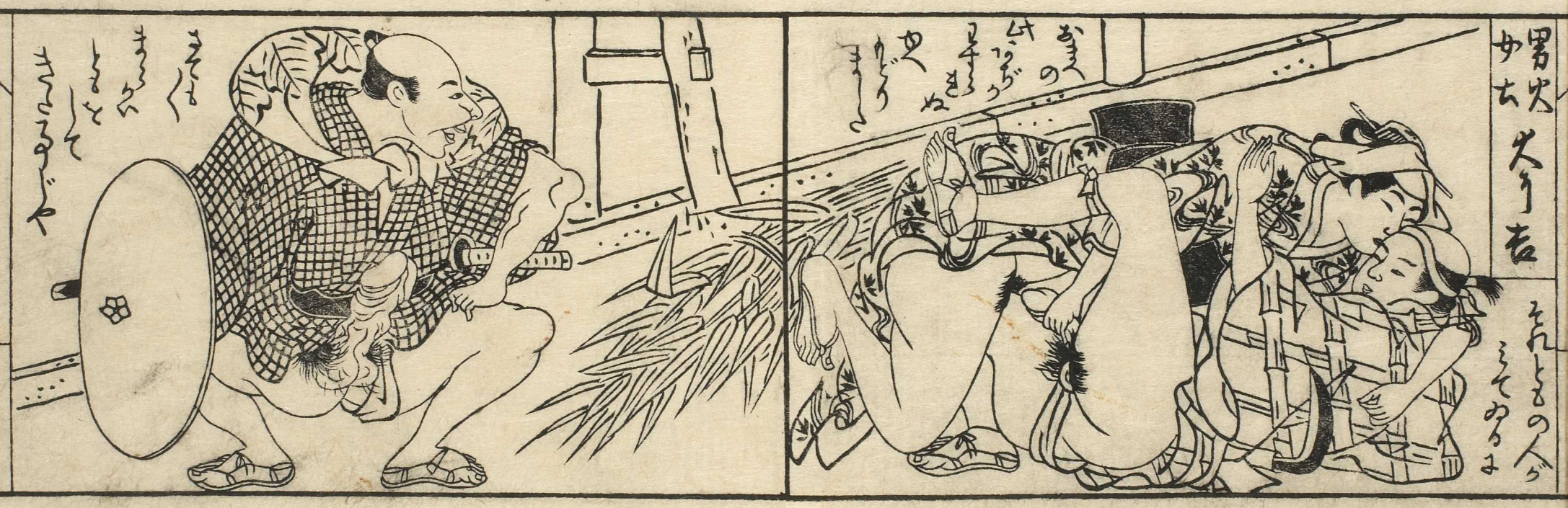


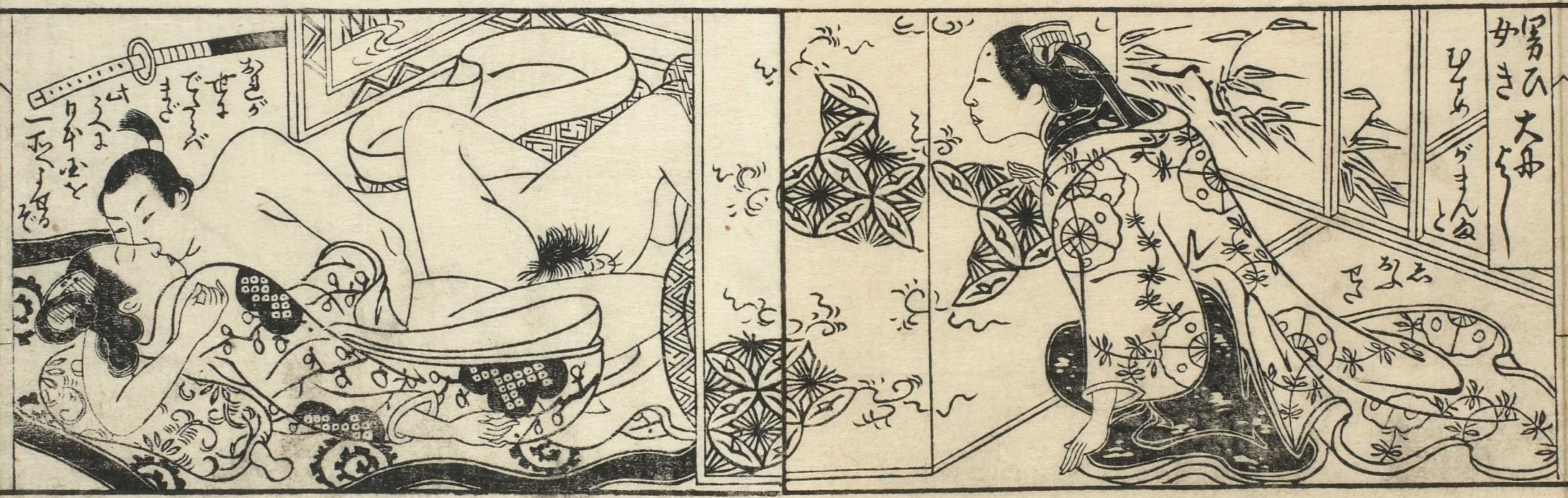
これがてんぢくのわくるそ
雷本
みな本
ろち函

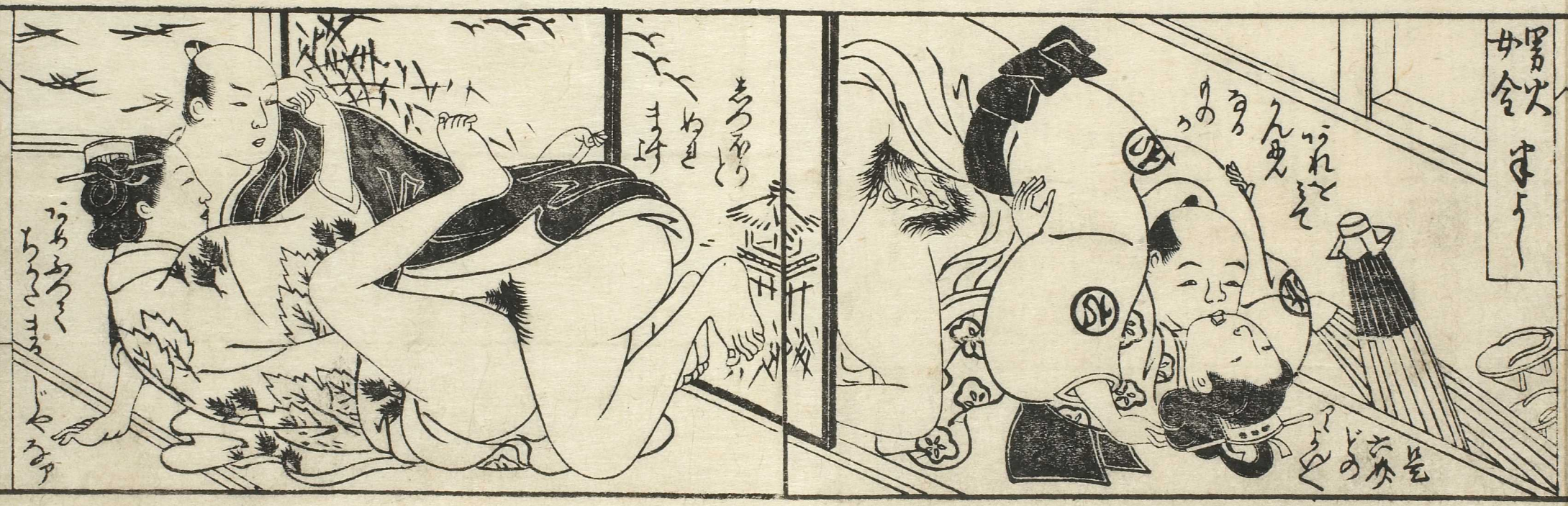



そこな大ふ
もんる犬
ひと
いよでぞう
おとこ
ごろうてうろうろ
あてさるぞ
つよそ

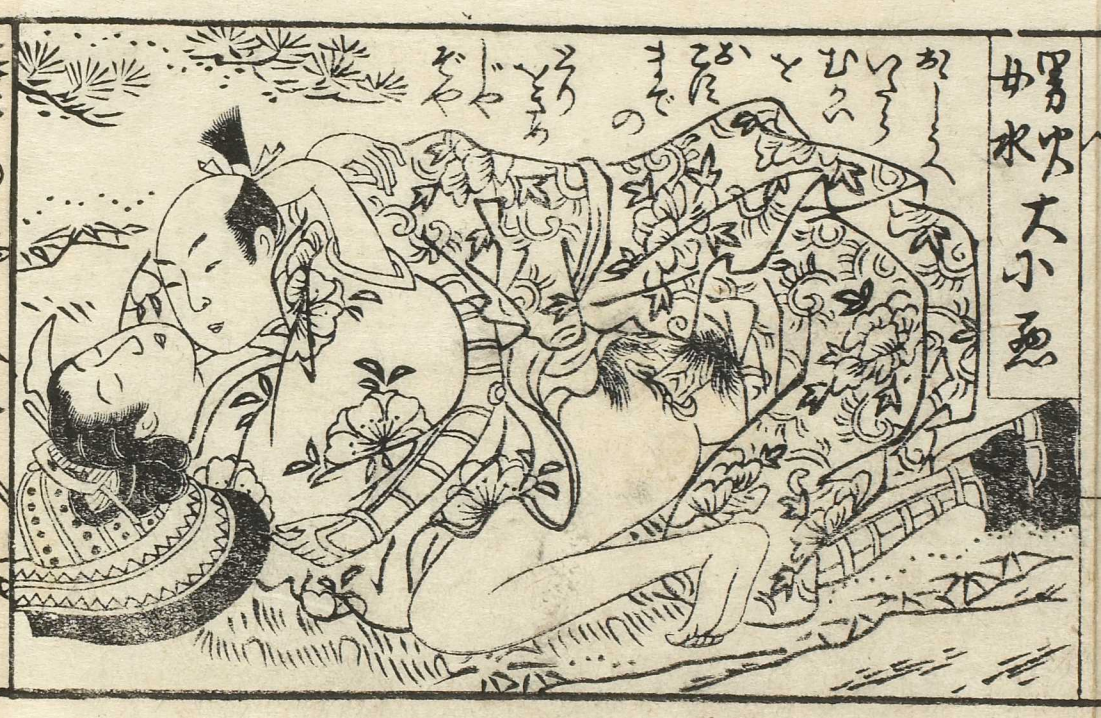
男女女大大由
ふるひのさねがひこ
これハこれハあちらまれ
ふるひのさねがひこ



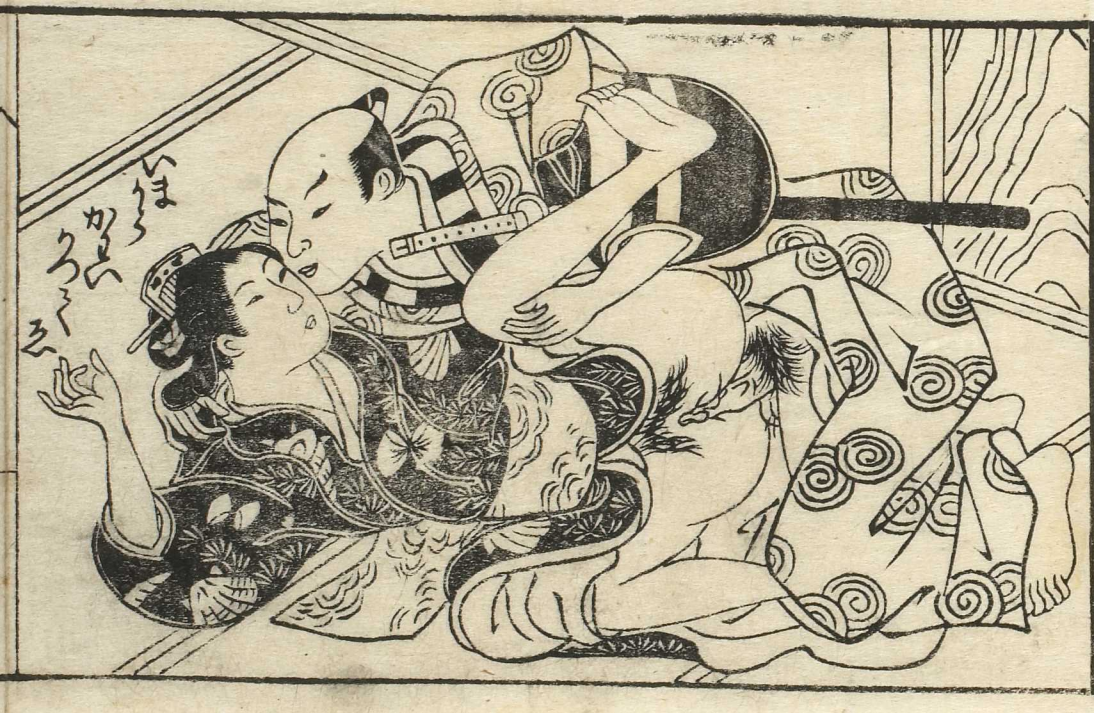


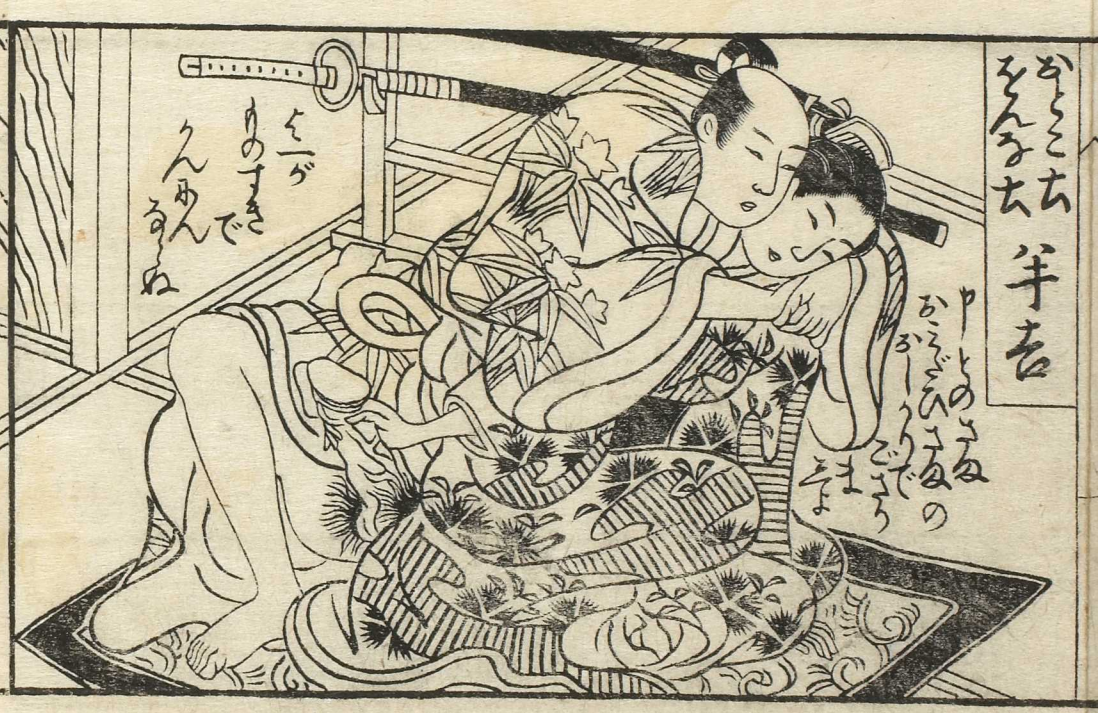


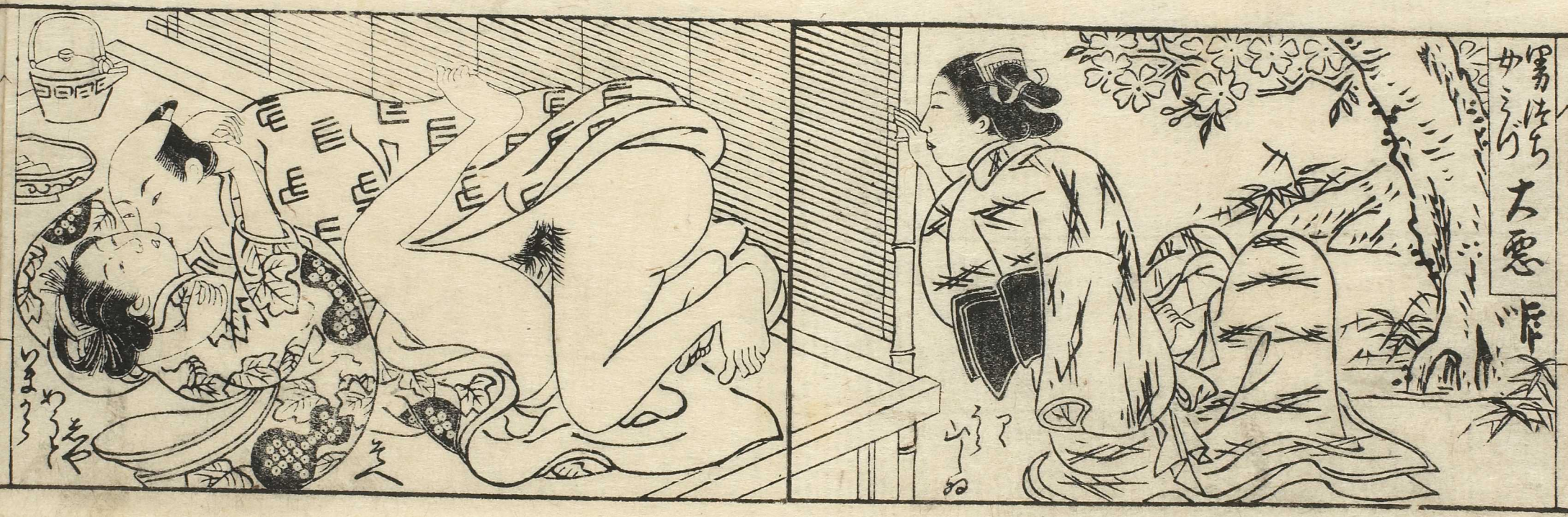
びやう

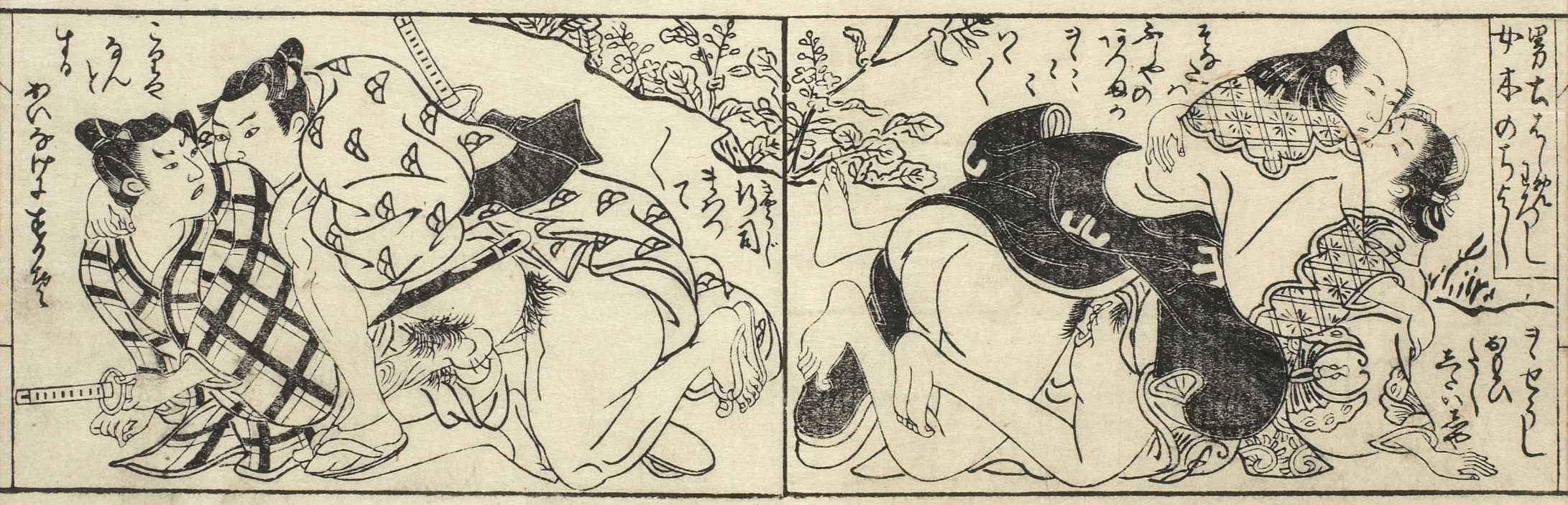

男女大小画
おーくいくいむこのとおどのまでのそろそろとぞや

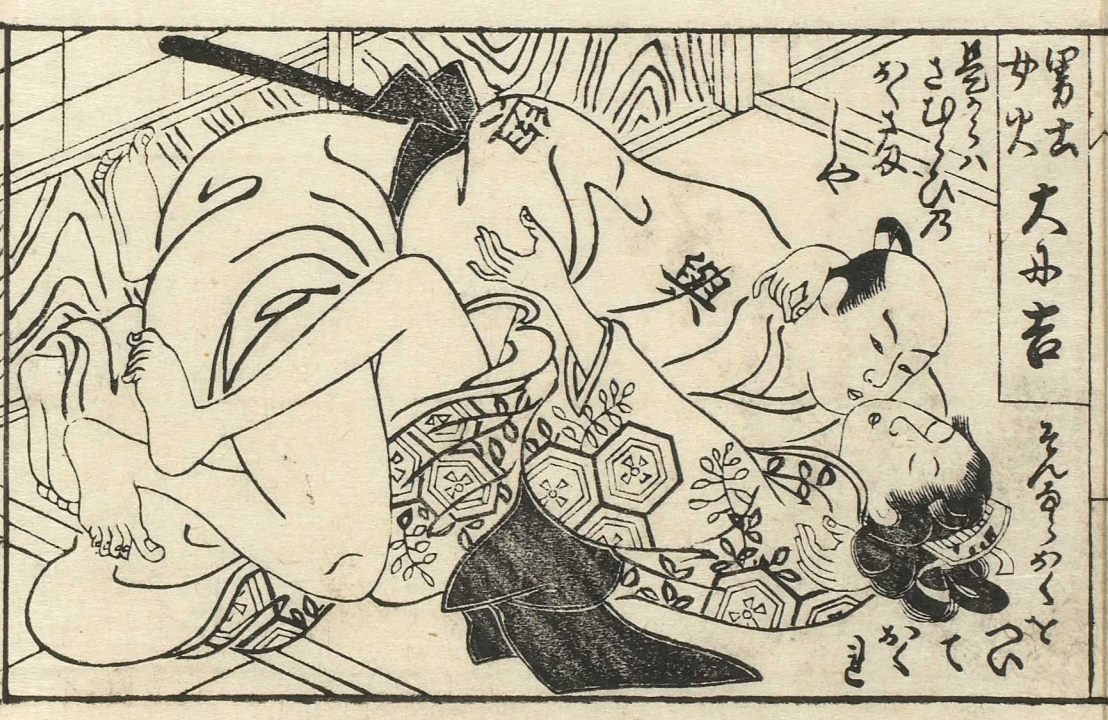
ひごろのおがみ
まれ
ごれそう
人がこれ
まるまる
まんがごうまぎ
えんもく
大吉


いほうかんろくろくろ

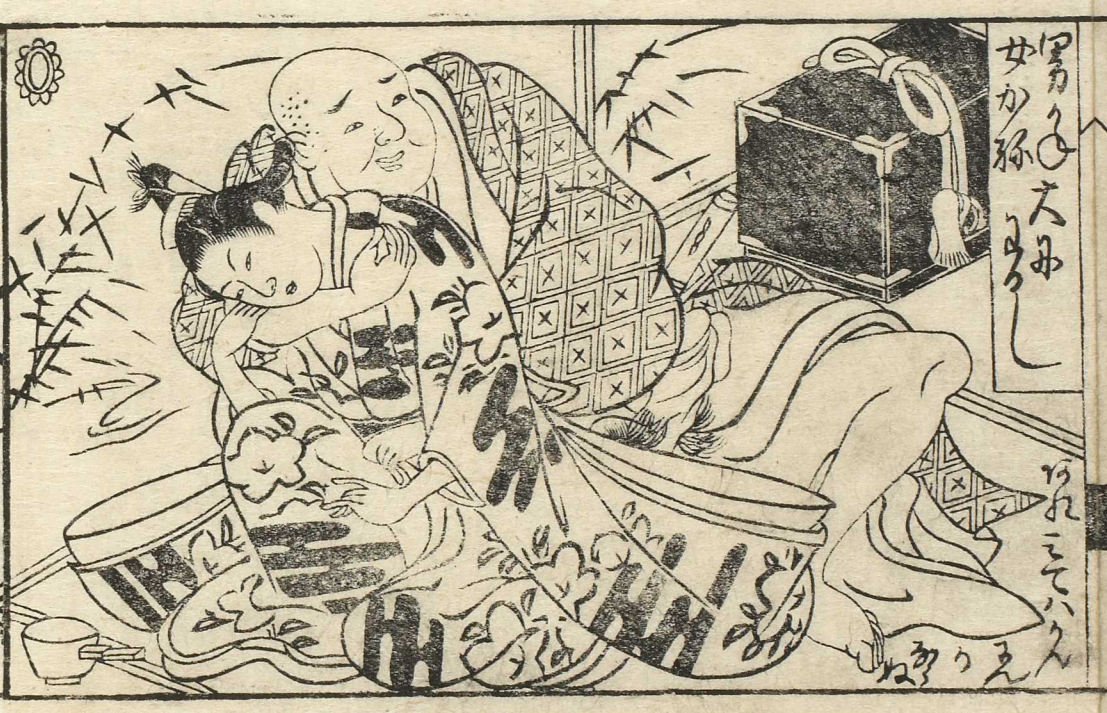

なんとんとん半吉
ヤレのさねおらぐひさなのおーうらでござまそよ
とうがのすきでくんめんするね

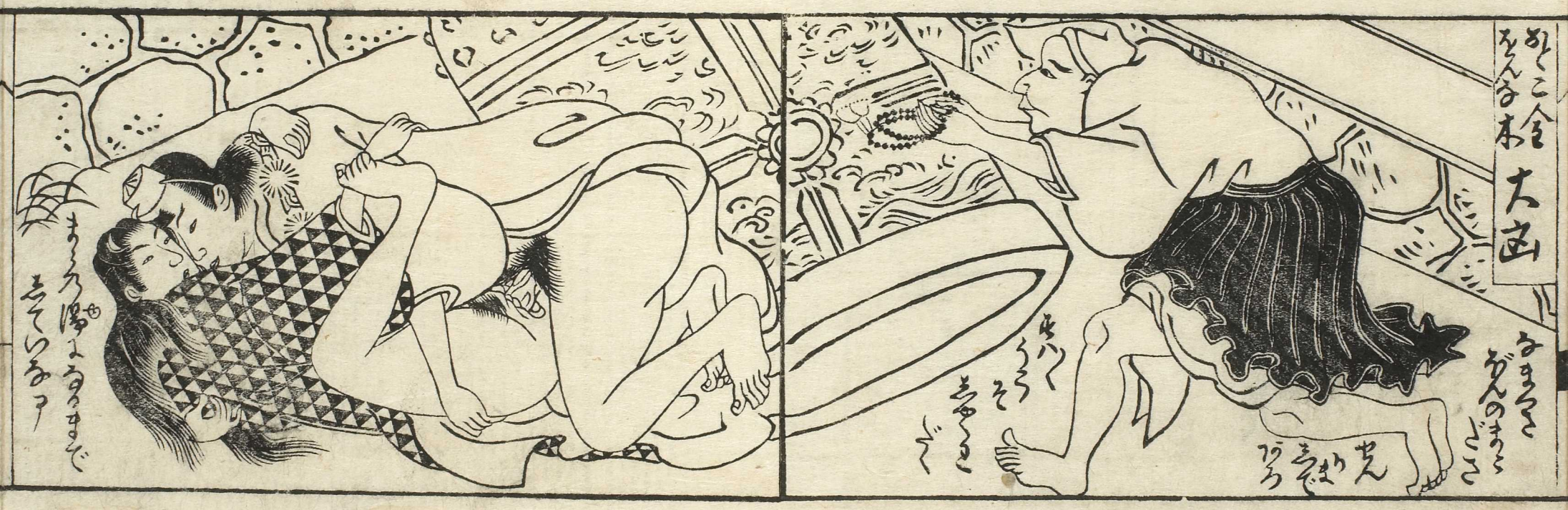

男はらかうぐ大悪

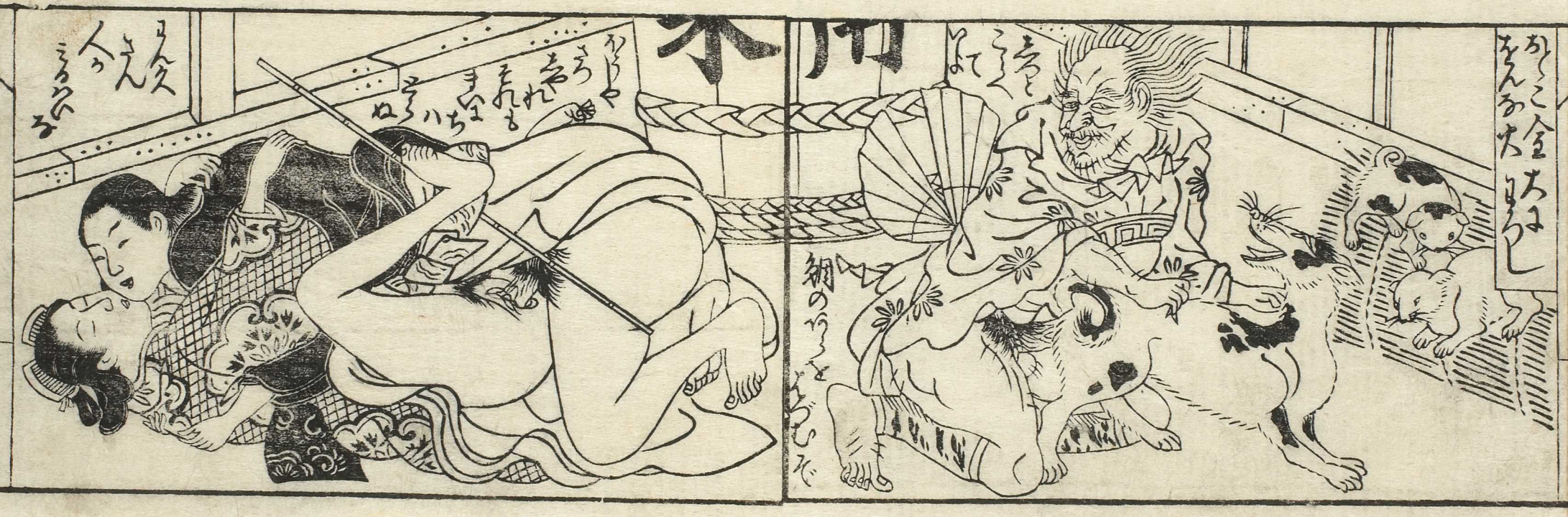



男女妙火 大吉
そんなにかくとてもかくとも
魚
魚
魚

うのまゝハさろ〳〵と称うろさろるぞ

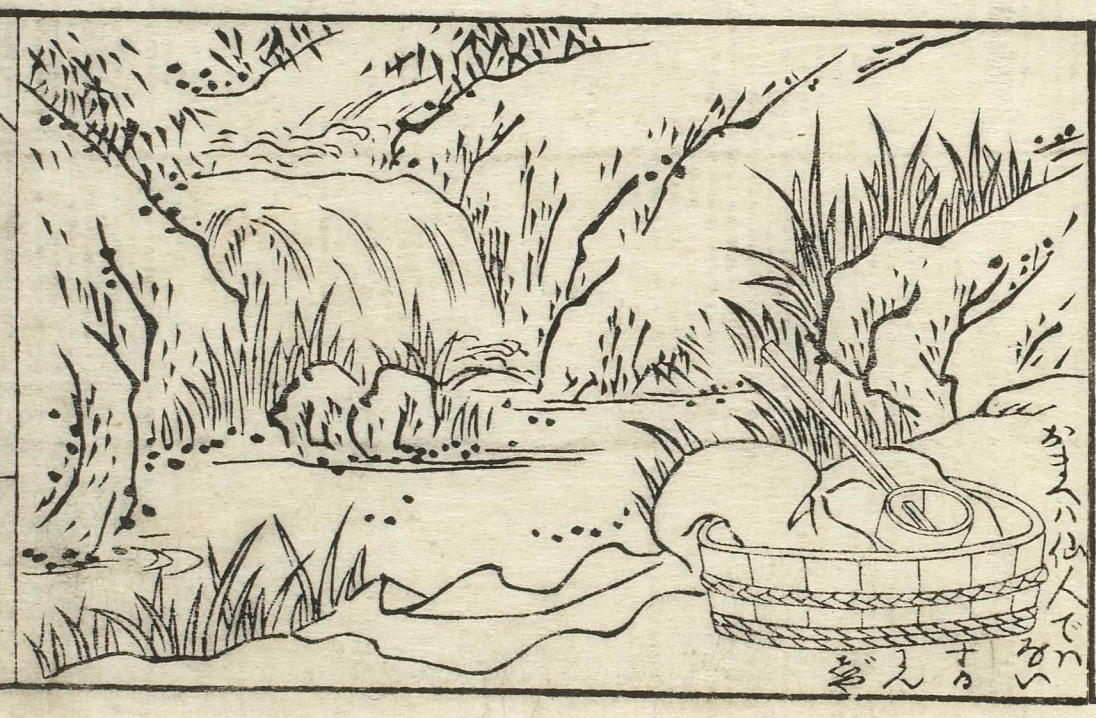

男と大み女か孫まろし



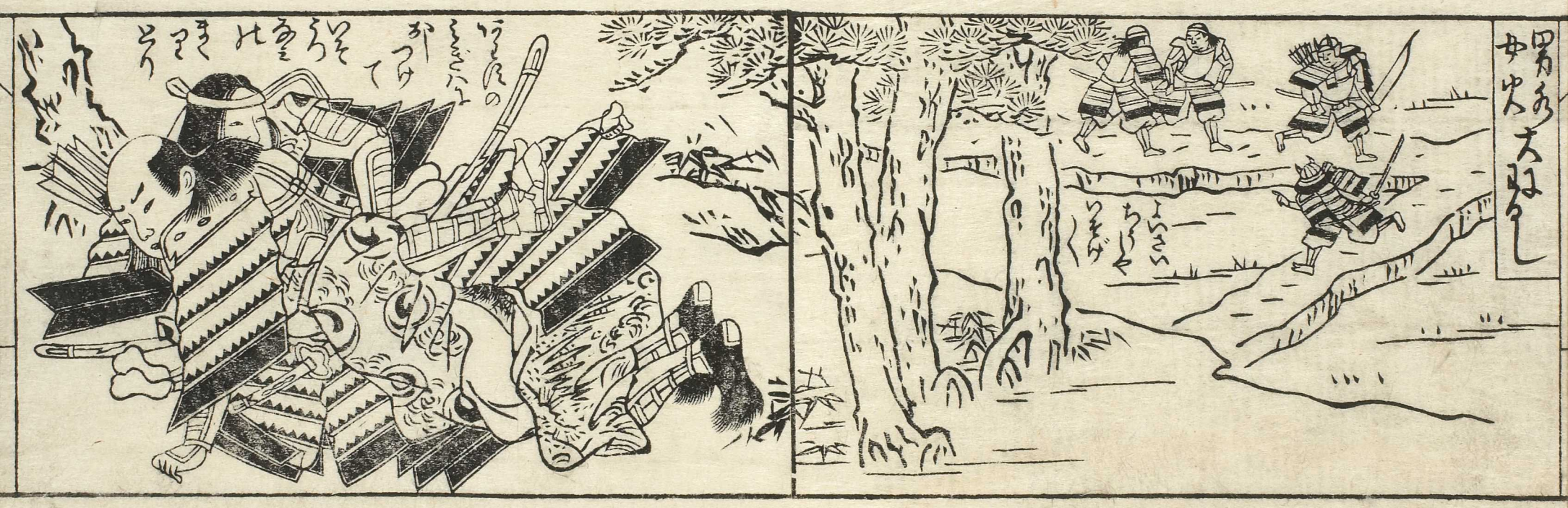


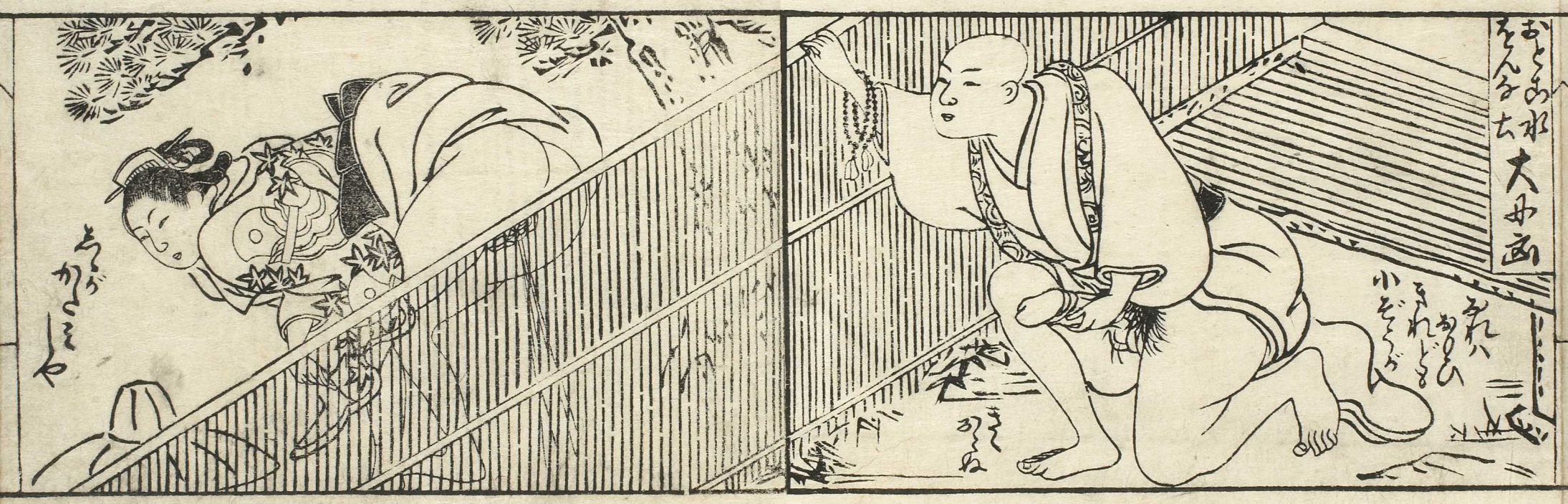
男うは
女たち大ふを
ロもうらもかぶってうろうろ
れそのそるそてさまいる

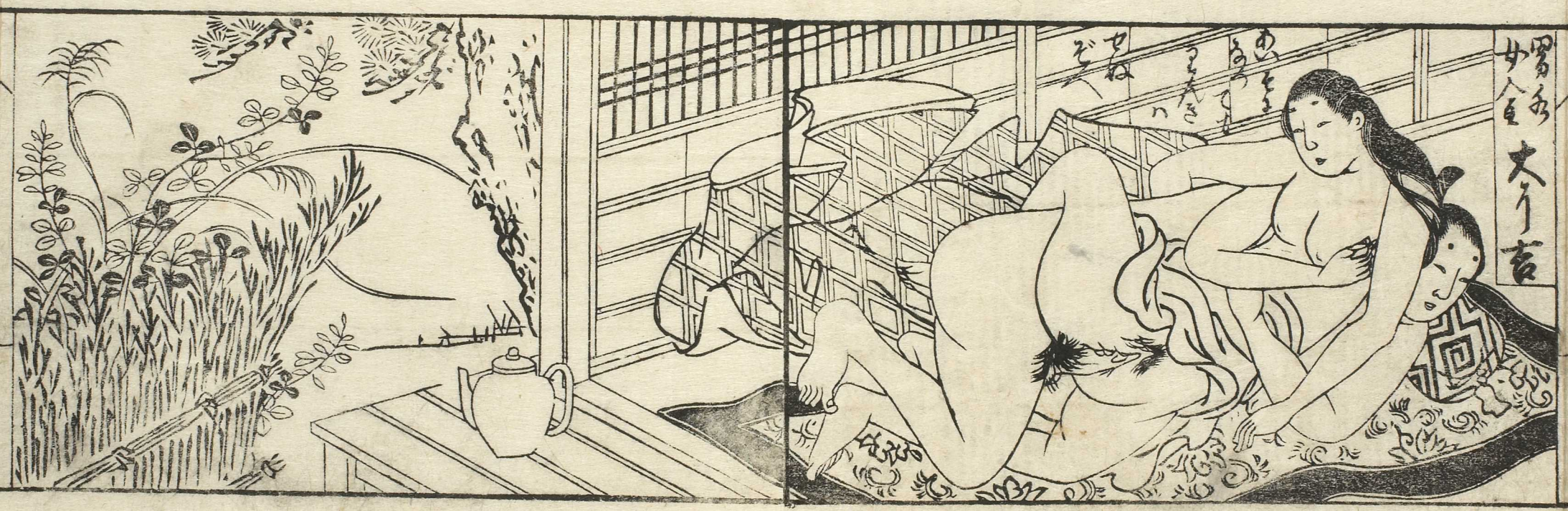
男水女水 大恵
うまのよ
ひすあのこゑうよ
こんやでおりひまろてをくもろ


おとこハ山へでかせぎする

おとこのそんな木 大木吉
あのきをろさうかしらへハあとよ




おとみおそんな大女画
それハあまりの
小ぞうぐ


男女人生 大千吉

三ヶ中代官どのとやらまでまつ
ゐるべきやうはふうぜんなるようなるうと
ハかれ女どかせどまりてぬ
えるまさりるのかくそんぞくつぬ
そひとりを大すきくく
ごにかくさのーふとんも中にまつ立
ふりにいろこりをうまつき
お井戸ばたより古人のあかりへ
とくとくと合ふとくく
えんおりを考へ
○男衆女金大よう迄そんやそん
ぐんのはまハりと友なそんぐんな
ふりし友女なりしをちようまう
てのちるともいまぢそ
ハぬぐひふいてハりかりるをこる
れりろをと垣ごーれのぞきて。ぬん
ぞーをつきやぶりぷへんたまぬ
りをやうんするまりと千づうの文
そくでけハの書さよ夜とぐりう
へんじをそいるなびくりれ
だりろをたよつそりうう軍勢を
しゆして。そんやそべせんさせるそん
ぐんををするまぐだいつものど
くくちとひてざきのまんみよ九
そさうの曲どうぶりーをこちくやう
て。おぜごくろかいてハぐりどやと
ぬとさーこそそもはいるとあつけ
てぬこくをうくといふ面くおそれ

かこにこれのこくぞいくまいぞんぐ
りんぐぐぐっぷぷぷいるるるねとんぐぐん
ふるるぬ。ぬまるるぬれがぐまそろろ
んんんすこれめいとのこびとをほ
てところく
○男本女本そしろ吉のちほ
いづくりいなぐく花のこるあ本
まがーきそほまくうちんん舎のそ本
むくこほまくうちてて三味線乃
大さい紀年のおもりをひさ
よ引をるんとこるぐさそぐ風
ろいとうてそろがれくハはるな
かよおりろいりのハあるまいとい
さぬうちこうくのりるるせ辺
人がんるいろとい、琴をまくう
ってをふいてえでお年そろさ
る一抱へおのおうとやうこの手ね
そくんさるんぎいるとくやはな
きつくく話もを。おりかをハ
くそとぬるとおくこく川ちあく
ハアスウのさいちくをりとうくあさ
ぎ母こふ女。女やさなのいふそろさ
ご大病えやうれりうれまをと
うるをを文をさしぐをもりハ
んんすありハアそんるくついぬん
おじやり。そぐそろるれくく
ちびせぬ内よりとるや
○男本女本そろーいるのくふ

おろとふ女良すき本一さ大力
るしがけをよいろもてまよおけ
るおうちうきおの法師をまぶよ
きそ。ふのこころるがかのろし中岳
かなごをふづろてきふふへそく
るうるるある秋けろしふがろへ
きうろのるとうまそるまかふ
ああーとつびてよいごをざとく
えんまべヤイよいふまんまふあ。よる
もびのいるとのおとふ須つうく
ふろつけ。ふーがうまいとふよてう
中岳のまんとふびまくまるそれびよ
いうをがよいてぐっと一ふあーれ
ばけろし同ともふさくー沫をえき
てふ入るう一時えうしてやうく
いきおかくふ今をたもうる
○男本女火大あう一義ふうれ
係昌源のらいうう乃係まて大台
山乃沼てんぐし七たいぐて物竜
あえをそつふれ糸ふをねさそも
久くのいるまでとそろまてそや
いさきはく。そうせうもるぐくふ
ふぼんうまべ哇そのやびかし
ふめんをにまむやうまど同ノ
ためくのんをいぐぐとうろいて
ねうぐとねりこむふそぶハドド
さいるえうのみくふハぐうもを
まねとすりびりまり

いろ〳〵のをまいでやまへハ雪(ゆき)
きらでおろすまれてをまでうつ
よみまし〳〵のよ

○雪(ゆき)次女(じょ)夫(ふ)よみ

うきにとせちんへゆくまもついく
ゆくりとをどいとゝおもをと侘(さび)
ぬいてたいどよもろ〳〵くもろ
るつまの伽羅姫(ひめ)まれをゆ
いろりくんをまでやゝとをいす
ハアスウいろてゝもろくれば
さぞひこへむづくもぐをうぬき
て洗(あら)と布とに帆(ほ)とみてうろ
さゝゝいをざゆ〳〵をのみをぐと
さよひ絵ハうとをゝひてふび

乃(の)めてこれどもまでのひよ
くうんおりるぐまこともやゝをべ
のそハをとのをくのさりしるまべ
とおごろのををろうて完(かん)ゆ
おゝゝゝくるぐ一秒(びょう)んまやを
ろんまおのそども(ども)なすることに(て)
今(こん)にちかとそ(ぞ)ゝ

○雪次女(じょ)大(だい)よみ

なよはをゝこのおやねをとて小(ご)で
人よをゝまゝしめうとをろうござう
ゝをやゝまでがうひぐんくよ
をいうとつまごちをくの伽羅(きゃら)
うをついてのそ女房(にょうぼう)和尚(おしょう)

かき人乃ま(ま)へおりのよ(よ)うつ(つ)きしづ
ほ(ほ)ざとり(り)おぐ(ぐ)りてぐんみとのぶ
とのおろかもひ(ひ)るまでそるすべと
そ(そ)くく(く)しるぐごろくむうの
るべ男の志(こひ)ーとふいとをも
りひくた坂よ(よ)ぐりるうのれ
ぬつどのれぐんぐんかちるまてう(う)れ
家(え)おーつはとみ月廿うくくちち
まきをこそたうりうくおそう
ろうりのおるうやといぐさつく
たこうさすぐごぐくくたるの乃
そくみびてやくとおそうるうりひ
芥垣(こうむ)のさまふそつひくものる
いるのりかり家(え)うのどりにて
注いきやくくとまいるうサウテセ
人乃ろまるうれねとのおそう
乃うさ綴で来(こめ)よかうるまば
さぐ(く)ら(ら)ぐ(ぐ)あぐ(ぐ)り国(ま)そくまよ大
さるるもお物てやるに世(な)
ものうぬつまの此(こう)まてうく
人姓(せい)をうハ
○男大女本大ちよ(よ)ー 男(ひやくの子)
ちうともひるぐお酒(くーね)よるぐ(ぐ)さまお(おやこう)
此(ここさまさ)政よあつけくまを年(つく)月をちく
らまーよ小条乃かもす政子(まさこ)で
ぶつくとぐ(ぐ)くのるおうるう
ざろうるまばうさるけくたぢ
るめるこそこにあるけの

ままごとのうつわの事にきゝうつて
ト　ふぢまりまゝぬらぬうつもお
ひとりでおさゞゐ　そもさうも
そこへいこうとちうこへひそ。をり
にうつてさしまるゐぢいまゝハ
てハなうとうつてゐうもせよ
夫のおこさでおくまゝとてをうち
てうぎうの内ひさぢうこと一ちう
よ嗜ねやてうりざまでさし
こしよぞゝいことんとうひしめ
てのりあるをとゝやうこやのま
ちうや年寄ちうひて撮かうこひ
さ母あまれ宅おとへ什物えなう
○男共出会　まうし

ようさんがよいまゐちうのうる
まん宅をおることゝへむびろ
くとやあこうゐんじやの
イヤそひめがまゝてもくそ
きんもつゝにうけのあうちをや
ひまおめゝ出そうせいゐんじやひ
まおうゝて男のうつけよのま
ゝさまやせひうないとまゐり
のをうそうまゐせじおゝとひが
てんをさうよハうな母がうゝさ
たそゝのくまでまゝさうひ
とうんでおうゐんじやうひ
ちうこゝにふうをゝぶうゝ
ちうとてゝ

かしかるそうこんこをしうこにて
男もぞくく身よもひやうにが
あてうしぐりうしねるまやよ
ばねうんみんをるさかゆそうとゆ中
の男でもつぬくごろちやくくごべ
のかんをいおへわめがふうちへ汗
ちうづくのちうりねき
○男火女水大よおくく言葉ふ
けをふまうまけ刻変へちりう
そひざにいづきよをやくさきく
もてきの中そのこへをようか
ごよのうおくふそびくちくうり
むういをうまて彼ていやそれまて
乃うりをえとかぶとまくた
ちぬ足ぐをしきふとくたくきくきこ
ものとまくこそ男一やうぐんん
ようでんをたこをつこのうへのの
ようきてうちりなれどもなれのの
やこさきことた又りおをいうきく
ろうまさも安の何ともえうをも
をうつもも一却のせうぬとた三
たこよそれ九たれひをりとた
くくうりづきは元ろくえちうへ
大よろうぐぐそのにそ
りくやうにムうこくうあさお
ちゆるくくとるいを安をよ私ふ
こくんぞくいるこぺそうう
あをうきしばのえんくくく

ずうぎ、かさをあつまく在ハまん仏
小ぞうぞハアスらのこへさそう
けもうとあいぎをべんりへんと
らくゝ○大木れふーけるをつきは
け一ぎくりをあつれで一かゝ名
もある松の木れふーけるをふりひよ
へ矢さき飽くつきねさる
○男女女会大よう一たいくれ
女盛りんの仁和くまいりるこ兄
ひるこるすけつるとうる友
女よりどのそてらるせむ
ともいよおこをかずこのかこり
ふごくゝ一もねとうきれだ
ヨット一こへてけ友女院の仁和
乃ゆるこるものふ乃をくたくまし
軍へとのふ乃をくたくまし
さを通されさばそうでるや
うにお仮くてきある家のへ
うけひの水よこるこるこそ
き出こをりそうとうをとうく
のけのずきぞうこう兵ハくく
とるごとくぎとをつでこんるひさて
くめらひそうさりのごこ、うり
仙花のよおこをやうとれまそ
それハハけへそあ
○男女女会ぎょう一物の九番
脚本うしすえもんぐ女へ大刀
るこごものうふ小若沢ぎか

射る矢よたうたの股へ射
こそれをこんぞう乙へ
そのつぬをせうらんと漆利
仁一ぴきへ紙ぐいつまよさぐ
めるぞうへ公へのまへあのあさぐ
とのそむ腰仁ぴとけりれむ
作のごとくこうとこそへ
たまぐらってんぐうふとのもひ
まへけっこでちそのこよこそ
おもちかぐだか中をあせごぐ
んびぐりのをうとはこあへあん
のをくつよきりのこちねんを
ぐへとくとこへぐりよ貝を
ふりあそるすりをうかさへ
かぶりつくやふめるやうそのわご
のよこそとうんぐんとへ大よそう
おとくこへなこををるへろ
こべなりりへもまひるさう
江そんせ中はちりとせ物也
○男女共あ大よわしへそのべ
れたつへ清水寺までうをもれ
ひ名をこそあふこのそりやりこ
十三夜ごやこふやこでさ
おへへぎん乃第うんせであ谷
まぐれかに江たようちとあ
第一ひきやどきをちつよつき
ものてそへとわーらいつきに
入くるとりへつうふ作へこて

そもちわがうまじよぐうとて神まてやうとてこそはきまつをまつほくぐうちやうとてのんをいわごぬのくぢでうりとのうたいのうござうよろ年（ちさ）りとまうりうよたうへ（まつ）てあるそのくるへやきとうをやきいこいやきやつりつてあでのやまをひとうびやいうてうとのをうく

○雪土女本とし先うし後なうしめづまがうやもうえとまをてのうこうてうのやてうへどうの事まひてへたちんたふまうてうなみう人ざもうそいまをあがまをりん在うてでうこてにねをづてをあうとうれごあれ長をとふすあうをうてあうりまうてうへうをんをうがいうあさてうくんやんうまうでとうのをごあれがとをおさ人やりにおいとをはしんりうもかう

○雪土女大　大ようしんぷ（ようふ）ぐ八二本さうはこれさてうを今日あうぶれがうそびをこあんそをもうがくるうのあざのうれあいうあんのをもふうへひうれんーてかうもふまふ日れ

まてハかんぬきをはとおつけ
ませぬ也これをこゝをくゝとゝてく
るひとりかくこゝうやわきく
ごきくをぱくくみちやくハやう
と田ごとぐんこゝをせぬつきや
ぶらかごとさんこうるこんてとと
ゞこゝ

○男金女大ゐまろーゝや
仔たこハタぎりもへのうこゝす
ぐさタぎりハまこと兒をくなーて
秋のすゝうぶゝとのあれこんぬ
よ仔たこゝれこゝやこんよおゐう
ハぞうぶゝとのあくよりてぞう
やういなぜよぬてんぱのてん

ゝのさやむまいゝやうおゝうまい
いとのでしゐとゝくゝさの四へ
みをこむりのきりハやこゝろけても
さすぐおをーやゝ兒のやうにやせさ
ぬて一ゐとみきりのぞまれば
あゝちう
庵中にのるもこんゝうるんとよ
ことりよせんやと狩りやと針
ハ兒てすむこゝや

○男金女大ゐまろーゝ川のゝこ
ゐもとゝりをまゐり一往んの大じや
とるりやもくと川とをまりる旅
手にをゝりゝうこゝをぶぬきハ
あん
安孫子そともかるゐ女ゐかりて
かゝハぶんをよゝりかゝとゝ陸

のそうりてい おさうしめと 一老
四まのちろとおやまる名や〜一
ろねとさ〜こめハをうまかごう
んめんうるものぞ〜同とおそふ
する吉ぞだつのろのつこも 拳を
まるくぎうするあ〜をあげてかん
ちんがうあうくうごまて七まうこん
ぞ〜一吉あついさ山ふ一ハ一ぞん気
おりんね

○貴金如水 大ふう〜 あそ免
ふう 典つうかつと大江医のくいるりれ
仮宜のむすめようつきすぐにね
ありにいみうつく女房の拳をす
るのおもひ典〜我やこの松
ハ吉ふ〜もふうりるを松むくるく八
ふひきてま〜こいるをれぞ
まさのうりをそそくづくや
ひいんそでもり典つうとだ
きつきうん典〜ふうこのやうふみと
うあつてもかつとそなふ時を
ろりんおえてまくうちひろけ門
りをそをひかをくことおそろ
毛のすにこるとりら上〜しふ
みぞふうくたまきこ一ろやと
さふをふくこ一をつくそろん
ハつがよをきさのやく入てセ
のぶ〜ろをふうと吉あてやひ
はろかをひろつてる

○雪全女次　大みそかの一ト和歌
八松のぼりつめかさでまつ候んぞう
とそひかりく松のハせんさなく
あとをとゝひてさするとのふまちろ
ねーとりこうんせさそのここ
いりうちきいかゞそろとて
あんまりなはつみうでとつきのけを
のうかりうしてこゝの一ト句ぐんそろ
くとはそすみやうをうるやうにづき
おろいさせんさくるうみのでく
分ろひるゑんぐうぐこゝもハぐう
もんめんるゝとのさトよ乳
とのまてなるいぬとそくて一ト句を
おこめぐらんくさうくしてする
○雪全女次　大みそかの一ト和歌
にふるねすさるうひかことを無
えんぼうぐうりてなりのむすも
後朝のまでもまりるゞ間
はをまうるうとひとせをも
天上ぬいてのこゝ女ろくハひとの
称のもめもすゞね幸多のあを
とゝすゝだんをえのやうみぶ
らいのゞかゝもあろいるとゞて
ムてそんるうゝもの雪のも
ろうそゝるうとはめうきてエナイ
あのゞぐそし先るんすもふねと
いとを分ますそうとんでんのそと

たのおくのとまやなどおほ
ぶとへくさのりるいりあひのうらさ
ばいてんそもつきのみもりんやく
ひとりとて女房へ家も無きさ
てそ人よこの道へうそそうおもひ
こくとのこころはつぶやきわれぞし
おもこころたび神無月ようみまてとそ
けうとたよりあてぎよいさい申を
まち川ぬきこすねそうかけ見あ
やまとうんめんをてきまつの道
をみ世一和ねとめてこりこれ
こうづきたこうをりくそ女房もも
久ーぶり文よてあるおしかけ
みちやくからやくのおとに男八洞
ごうそりうこんとうようの女房六
月もえいな在所のりくく
○雪水女郎　大よりの巻　衣川と云
あねごのおすけさごぜん源右
衛門と云ふ女郎とをいとこどもうそ
ごうもつめうあるなどの六年越
ふる月よむつまじひかた
いなそはそうな在所を望そとい
大望強勢家の娘入ごくそうな
あさんろ気よそうのおとの衣
川をうくに内くのそこにおとふ
家よやうそうて在のなさごぜやう
うんぐれをやするそうそうて
ぐれうへさつけさごぜんや

ろくこち出りこそがせみのとくこくて
ゆ。たてきねまるんのうめこういろぞのる
それでいれりまてるうらこうたれて
行うこんなそんざまこんや一五でき
きうてうくまし、ゆまりをねろう
うまうこと歌まのうをあうづまをの
びこむ。けさこちんをう気のやうるまを
うそりうこそてうぎのうりへいこさ
つきはすうれだりをうまくく
のおへまをハ仰ねめのやうを月
りたらうこのやうを毛のすこ。ほ
さうるまハるねとのうかりいりの
ほくうをくそのそをきをバトうう
もうくこうとつこてうちうるける

さねみつまそひくりやよあ
けのそりけこねまをたれるがそのの
ぬちもをそこやもそど、なすのだん
のとりうるまもく人めもかねばそう
ふせうねをけさぞせんもみきしい
うう日こいねこうめつくこうるく
むをまくく、うよまカタうろ
さこまとしせまおいを
○雪水女本大まうこうてくくく
なくまろふこてをヨとうこひ
るうくかてせんぐくをまのまうう
ようふくらうるふのこねるまでをそ
ようくかけて。けびろどのまくきんち
やくこうまのちうくこねるり

おーそこを飛ばりくる人来よ乎仏
人見をそてりそいう兎ーそうぬ
とうでまとたよ雲のうちうう
ぐぐぐとおちるやいなやたちつき
の雲よやをいれむすあ。その時
いさいちうぐび」そんのゆきたいてう
ヲこんともいうぐ兎とうられえ
きまのつかりぐくの風来
本の宝松葉のめぢといくべつ
りそやろくと仏人、雲そうく
もう人よおでとめうとうめそ
そもかせき九子亀まてゆきを
うのくめてそう
○雷水女大　大よるそうきまき

巳中ういりみんなれでそえ
ごば一ちよとばりうよいでまて
れとるさ。そんづくよ　すぐつく
本当をもうろ公よりくく一抱
いさぎうくをうとおいぐをいざ
義仲がさいごの一ぜんとろひの
うろひそすてくおちだうり
おやーす兎」くのまくよかひ
てぬいうさうりそろうそ乃
まうぐうりくんもを一双のよう
きとろひのうぐうよひき
ちうびくはのーあえぐハ
涙田よ水をまるいつまぐく
もさにうごうハほそぜぐぐん

せんそうのあいだ四ねんくらいには道乃混雑のおりからこゝろにもとゞめず義いつぱうで幹のうえと義との道すぢにあるやくそくてがみ道ひろうつゝのさまをかきそへてたゞちにかへしたるのみにてとゞめおきぬ

文政二年
卯四月日

安斎随筆